

元型論のレゾンデートル^{*})

——不確実性への新たなアプローチ——

中 込 正 樹

目次

はじめに

第1節 元型論への誘い

第2節 貨幣への認識

第3節 「意識の中心」と「心の中心」

第4節 不確実性と元型構造

はじめに

経済学は、近代合理性を認識論的基礎として成立している社会科学である。それはこの学問体系の「強さ」であると同時に「弱さ」または「制約」となっている。体験談的なスタイルで議論させてもらおうとすれば、経済学を学んだ後、その理論的視点から人間たる自分を見つめ直した時、あまりにも説明しきれない自分の存在性に気づき驚かされるという問題がある。もちろん経済学は、人間の「全人格的な存在性」を引き受けて社会科学を構築しようなどとは主張していないし、その方法論的な基礎である論理実証主義的な視点もきわめて「謙虚」なものである。よって経済学にとっても、あまり期待されすぎた末に、一方的に不満をぶつけられることは、「迷惑」なことなのかもしれない。しかしわれわれは、経済学という学問によって満たされなかった人間と人間社会への探求を、いかなる形でさらに深めていったらよいのか。経済学はそうした探求への首尾一貫した方法論を何ら指し示していないし、またさらなる探求への意

^{*}) 本研究ノートは、文部科学省科学研究費(萌芽的研究)の成果の一部を含むものである。

欲・情熱をかき立てるパラダイムを提示してはこなかった。具体的にいえば、たとえば哲学や心理学などの知見と経済学の理論が、いかに有機的に関連しあっており、その相互作用からいかなる新たな学問的發展が期待できるのか、こうした研究はほとんど真剣になされていないのが現状である。ただ「他の条件にして一定ならば」というお決まりの台詞を繰り返すことで、「やっかいな問題」はすべて棚上げにしてきたのである。しかし「やっかいな問題」の中に、玉石混淆ではあるが、実はきわめて興味深い人間と人間社会の問題が含まれている。われわれの社会が複雑となり、制約された理論的条件の中だけの経済学研究が急速な収穫逋減状態に陥っていくに従い、この棚上げされてきた問題群への関心は逆に高まっていく。それは当然の理である。しかしここにも「既得権益的」主張が現れる可能性がある。それは棚上げされてきた問題群を積極的に取り上げることが、従来の経済学に対して、大きな方法論的反省を突きつけるがゆえに、問題はさらに深刻なものとなる。新たな学問研究を進めていくことへの意識的・無意識的な抵抗は大きなものである。われわれはこれまで築き上げ慣れ親しんできた学問領域に対して、シュンペーターのように、「既存の知は制約である」と言い放つだけの「度量」を備えていなければならない。

この研究ノートでは、新しい方法論的方向性を探してみる。それは「元型」という概念を経済学的にいかにかえるかという問題である。この視点からのアプローチは、従来の経済学がその根本に持つ近代合理的人間像のパラダイムに対して、本質的な挑戦を宣言する。またミクロの人間像のみならず、社会・経済へのマクロ的視点においても、既存の経済学のパラダイムと厳しい対立関係に立つ内容を含んでいる。われわれはあえて厳しい対立関係を持ち出すことによって、その中から新しい理論的可能性を見出していきたいと思う。

第1節 元型論への誘い

元型とは本来はフロイトの弟子であるユングの用いた心理学の概念である。¹⁾

1) ユングの元型論については、Jung (1966), Jung-Kerenyi (1951), Hillman (1983), Samuels (1985), 林 (1998), 河合 (1977, 1991), 河合 (1998)などを参照にせよ。

この研究ノートでは、新たに社会科学の方法論的な方向性を探っていく上で、それにもっとも適したやり方で、この元型なる概念を必要に応じて作り直していく。

元型というからには、何らかな意味で、われわれ人間の認識的パターンが、ある共通の型に規定されていることを意味していなければならない。それは人間自身がその型の存在を意識しているとか意識していないとかの問題を超えている。むしろわれわれは普段、そうした認識的パターンに固有の型が存在することを忘れていることのほうが多い。しかし無意識であることは、存在しないということと同値ではない。たとえば人間の身体的側面を例にとって考えてみる。われわれは先祖から受け継いだ遺伝的特質として、直立二足歩行をしている。これは人類共通の身体的・行動的な特徴である。そのおかげで人間は手が自由に使えるようになり、それによって脳の働きが飛躍的に発達したと言われている。しかし他方、野生の動物のように、4つの足で荒野を力強くまた俊敏に走り回ることはできなくなった。また大きな頭脳を垂直に支えるために、肩や背中に重量的な負担がかかり、身体的な疲労を生じやすいなどの構造的な問題を抱え込んでいる。しかしわれわれは、日常的には、こうした直立二足歩行の型を、自分の自由への制約だと意識的に考えることはない。意識的に考えることはないが、しかしこの身体的形状は、明らかに自分ではどうすることもできない遺伝的な型であり、われわれはその条件の制約内で生きていることは確かな事実である。

ものを理解して意思決定を行うときの認識的パターンにも、人間自身がそれを意識しているか意識していないかの問題を超えて、1つの型があるのではないか。そしてその型とは、個々の人間にとっては、自分では自由にコントロールしえないようなものであるのではないのか。たとえば人々が「理解できた」とか「わかった」とか思うとき、なぜ理解できたのか、なぜわかったと判断したのかの根拠をさらに掘り下げて考えていくと、自分の心象世界にある1つの型に「合致した」というイメージが浮かび上がってくる。こうしたイメージの成立とともに人間はものを「理解した」と判断するのである。しかし心象世界

にある型とは何か。もちろんその型は、しばしば意識を超えて無意識の領域にも広がった存在であり、それゆえわれわれの意識的自我は、直接的にその型の存在全体を確認することはできないかもしれない。しかし意識的な認識行動の背後に、こうした根元的な型の存在を想定しうる十分な状況証拠は存在する。ユングの心理学は、このような共通の元型的認識パターンの状況証拠を、数多く提供するものであり、その意味できわめて興味深い内容となっている。このように数多くの状況証拠が存在するのならば、たとえ元型の存在全体を人間が直接的に確認できないとしても、人間学としては「理論的な想定」として元型の存在を認め、そこからわれわれの考察を発展させていくことは大いに意味のあることになる。²⁾

もちろん元型論に対しては、さまざまな理論的レベルからの反論も考えられる。既存の経済学からの反論としては、まず「科学」としての客観的な理論展開を擁護する立場が主張されるであろう。つまり一定の仮定集合から出発して演繹的に1つの結論を導いていくプロセスを理解しようとするとき、それはわ

-
- 2) また心理学的立場からすると、こうした元型は単なる「説明のための構成概念」というよりも、それを超えて「自律的な魂の現実性」を表わす概念ということになる。河合(1998)は次のように述べている。「ユングは集合的無意識の存在を結論づけているけれども、それに対する説明は「その解釈がびったりしたから」というものである。元型というものは証明できるものではない。証明できないにもかかわらず元型という言葉を用いることは、元型が構成概念であり、説明に便利であるからという印象を与えるかもしれない。つまりあるイメージに類似したイメージをいろいろ挙げて説明するよりも、ある元型に関係づけた方が説得力があり、便利であるというわけである。そのような意味では、幼児性欲やリビドー論をはじめとして、無意識という中心的な概念に至るまで精神分析の概念は全て構成概念であるということになる。これらの概念はすべてフィクションであり、実体としては存在しないけれども、これらの概念を通して見ることによって現象がわかったり、より明らかになってきたりする。しかし元型は単なる構成概念や説明概念であるというのとどまらない。あえて元型という言葉を用いるのは、それがイメージのリアリティー、魂の現実性を表しており、またそれによってイメージに関するコミットのし方が全く異なってくるからである。…元型ということでユングが表そうとしたのは、人間の主観を越えた自律的な魂の現実性なのである。ユングは「観念は存在する限り心理学的に真実である」と述べて、心理学的観念やイメージを象にたとえつつ「象は存在するから真実である」と言っている。つまりユングにとっては、いわゆる現実的に具体的に存在するものの存在が疑えないのと同じように、空想やイメージも真に存在するものなのである。」(119-120頁)

れわれの遺伝的な認識パターンに基づくきわめて「特殊」な理解の仕方なのかどうか。もしそうだとしたら、どこがなぜ特殊な認識パターンとなっているのかという反発である。さらに演繹された結論は実証的にテストされるのであり、そのテストによって棄却されなかったものは、一応説明のための理論体系としては、受け入れられねばならないと考えられている。このときフリードマン的にいえば、仮定集合の「もっともらしさ」を直接的に議論するのは愚かしいことであり、その仮定集合から演繹された結論が実証的に棄却し得ないものでありさえすれば、その仮定集合の「意味」を詮索することは無用なものであると考えられる。³⁾

しかし実際に経済学は、このフリードマン的な視点によって、無限の仮定集合の組み合わせが導く結論の現実妥当性を、すべてもれなくチェックしようと試みてきたのか。むしろ建前としてはフリードマンの議論を受け容れながらも、われわれはあまりに「不自然」な仮定集合に関しては、「理解し得ない」または「納得し得ない」ものとして最初から排除し、ごく限られた仮定集合のみを考察対象として選択してきたのではないのか。ここで「理解し得ない」または「納得し得ない」として排除する基準は、何であったのか。日常の生活世界の中で、それぞれの研究者が身につけてきた理解の仕方が、この仮定集合の選択の問題にも「忍び込んで」いるように思われる。たとえば他人の研究論文を評価するときに、その実証的結果を重視するのは当然のこととしても、しかしそれだけでは問題は終わっていない。その理論が「すばらしい」ものと判断できるか否かは、仮定集合の持つ「意味」または仮定集合が結論に対して持つ関係論的な「意味」が理解できるかどうか、こうした点が大きな影響を及ぼすと考えられる。「興味深い論文」であるか否かは、論理実証主義の建前とは異なって、実はこのような「意味の理解」に大きく依存している。「科学」としての経済学の中にも、その公式的な建前とは違って、われわれは多くの「人間的理解の方法」を紛れ込ませている。ではその人間的かつ意味論的な理解の方法は、いかなる

3) Friedman (1953) を参照せよ。

基盤の上に成立しているのか。たとえ現代の経済学が、「10人の経済学者がいれば11の経済理論がある」と批判されるように、百家争鳴の状態であるとしても、それはこの学問体系の一面を強調した言い方に過ぎない。客観的かつ冷静に考えれば、経済学者の間には、何らかの共通の理解の仕方が明らかに存在する。そうでなければ、例えば研究誌におけるレフリー制度なるものは成立しないことになる。⁴⁾

経済学者の理解の問題に話が流れてしまったが、しかしこの研究ノートで考えたい人間の認識論的な元型の問題は、単にこうした特殊な問題のみを扱おうとするものではない。実際にこの社会の中で意思決定をしてそれに基づく経済活動を展開している人間全体の大きな認識論的特性を扱おうとするものである。もし一般に人間が上で述べたような大きな認識論の特徴を持つとしたら、そしてそれをわれわれが重要視するのであれば、社会科学を展開していくための大きな理論的フレームワークに重大な影響が及ぶと考えなければならない。いや方法論的に根本的な再検討が行われるのが当然だということになる。なぜなら

-
- 4) こうした問題をより一般的に論じるとしたら、われわれはかつて W. Dilthey や西田 (1947), 和辻 (1962) などが論じていた「説明」と「理解」に関する認識論的相違について考えなければならない。塚本 (1995) はこれらの相違を、ディルタイについて次のように解説している。「ディルタイの基本的な学問観というのは、「自然」には自然科学的な「説明」を、「精神生活」(心的生)には精神科学的な「理解」をわたりあてるといふ、いわば認識論的・科学方法論的二元論に基づいている。そしてこうした学問的発想は、一方における科学的「説明」の理論構造の進展にともなう、今日のわれわれにあらたな問題を提起しているのである。まずディルタイによれば、「理解は認識という一般概念に属している」わけであるが、あくまで「理解」は「説明」に還元できないような種類の認識作用だということである。つまり「理解」は、「自然科学的方法とどのような種類の類比ももたない手続き」と考えられている。」(9頁)また塚本は、これらの相違を指摘するだけでなく、これらの関連性を次のように述べていて興味深い。「一方で「説明」が要素分析に基づく(ただし、一般法則が説明原理とされることを排除しない)とすれば、他方の「理解」は全体把握に関わっているということである。それゆえ「理解—解釈」は、究極的には世界および世界根拠にむかわなければ落ちつきどころが得られない。じっさい、ディルタイ自身が晩年に世界観研究にむかったことの意味を、そうしたところに見いだすこともできるのである。さて、とにかくこのように考えてみると、「説明」は全体把握を志向する場合に「理解」とむすびつき、また「理解」が全体にとって構成的な部分の記述分析を不可欠にするかぎり「説明」ともむすびつく余地がある。そういう相補関係が一般論としてなり立つと言えるのである。」(10-11頁)

ば既存の経済学は「選択の自由」の問題を、われわれが実現すべき最重要課題として考えてきたのであるが、この点に関する理論的理解を本質的に変更する必要が生じるからである。元型論に従えば、人間はその認識的側面においても、無意識的に元型的なる型によって規定されているのであり、その1つの型の中で人間は初めて「人間になる」と考えられる。しかし選択に関して、従来のように自由の獲得を一方的に強調することは、人間を人間たらしめている元型的条件の意味をも無視することになり、われわれが「人間になる」こと自体を否定することになる。既存の選択の自由論と、ここで考察対象となっている元型論とは、この点において、真っ向から対立するパラダイムとなる。⁵⁾

では具体的に、経済社会を広く見渡したとき、人間の認識的パターンはいかなる点で、元型的特徴を強く示しているのか。次節では貨幣の問題を取り上げて、この認識論的元型論の重要性を明らかにしていきたい。

第2節 貨幣への認識

貨幣は従来の経済学の中では、交換(または売買)の効率の達成をめざすために「発明された道具」であると考えられてきた。貨幣が存在していない物々交換経済では、取引を行う両者の需要がちょうど互いが保有している財と同時的一致をみない限り、交換は達成し得ないという困難性に陥る。しかし貨幣が一度、どのような財とも交換可能である媒介物として出現すれば、こうした物々交換の双方の一致の困難性は克服できると考えられてきた。ここに貨幣が道具として発明される根拠があるというのである。

しかし貨幣の本質は、このような「道具論的」または「機能論的」視点のみから理解できるのであろうか。実はこの疑問に答えることのできる数少ない研究が存在する。それは何をおいてもジンメルの「貨幣の哲学」であり、和書では吉沢(1981)および今村(1994)などの著作である。こうした諸研究は、そ

5) 前著(2002a, b)で私は選択の自由の概念を超えて、多相的自由としての心の自由の問題を論じたが、こうした自由の概念の再検討が行われて、はじめて、ここで述べている元型論的な人間観と自由の問題が真に統一的に論じられる地平を獲得できる。

れぞれの主張に特徴的相違は存在するものの、共通の理解の方向としては、いずれも貨幣は人類によって発明された「道具ではない」という点を強調していることにある。では貨幣が人為的に発明された道具ではないとすると、それは何なのであろうか。

これらの考察では、人間が社会的存在としてこの世に現れた最初から、貨幣ははじから本来的に存在するものであったと理解される。ここで問題にされているのは、明らかに、貨幣の素材的性質に関してではない。貨幣という認識論的な性質、または「貨幣形式」に関してである。例えば吉沢は、はっきりと、貨幣なるものの形式は人間の認識論的な「原型」であると主張している。

まず吉沢は、貨幣経済と社会的存在としての人間の認識的構造、または貨幣と「精神作用の型」を関係づける。これは認識論としてはきわめて興味深いものである。吉沢は、人間の精神作用の「型」について、次のように述べている。

「精神作用は、つねに未知なる領域や不確定なる推移、混沌に圍繞されている。われわれのまわりは変幻極まらず、無限の様相を秘めているともいえよう。だが、精神作用は余剰の空白を秘めた中心項をもつことによって、型としての閉鎖性をもちながらも、開放性を保持し、圍繞する混沌に安定的に対処することを可能としている。体系の要素の数は限定され(閉鎖性)ながら、余剰をもつ中心項の意味づけの働きによって、われわれにかかわってくる混沌の一部を部分として意味づけていく(系の開放性)。このようにみると中心とは、既存の部分の意味づける力と、いまだ知られざる部分を生み出す力とを与えられた項であり、いまだ知られざる意味を賦与する力でもある。われわれにとっては、貯蔵品のなんたるかを知りつくしえない「意味の貯蔵庫」ともいえよう。」(154頁)

人間が物質代謝をこの精神作用の型を介して行わざるをえないとき、われわれの経済は「意味の衣」で覆われることになる。つまり「人間にとっては裸のままの物質代謝などありえない。中心から意味づけられ、部分として位置づけられた物質代謝であり、意味という衣を纏い、意味を中味に含んだ代謝の過程」(155頁)となる。意味世界のなかで、貨幣を中心項＝「ゼロ記号」とする財の領域は、1つの「象徴体系」になる。「財の領域でも個々の財を財とするのは全体

のなかでの意味づけに拠っており、中心項との関係で部分とされ財とされる。」
(156 頁)

吉沢は次のように述べている。「貨幣は貨幣材のもつ物質的性格によって貨幣になっていないのと同様、この次元をつくっている財も、その物質的諸特性のみにおいて世界を構成するのではない。貨幣との関係、貨幣によって意味づけられて財となっている。その意味で財は、物材を素材として、それ以上の意味をもったもの、あるいは素材によって素材そのものとは別の意味を顕わすのである。こうして財の領域も貨幣をゼロ記号とし中心とする象徴体系」(同頁)となる。

認識論的に理解された貨幣は、もはや便宜のために「発明された道具」ではなくなっている。「財の交換が貨幣を生みだす」とも考えられない。人間の認識論の原型はすでに「与えられて」おり、貨幣の存在性はこの原型に由来する。人間社会は、貨幣によってはじめて、その内部の経済社会関係を積極的に形成して「社会」となる。「貨幣を中心項とする原型のなかで、われわれは物質代謝を遂行しているのだ。」したがって貨幣を発明したり廃止することはできない。「諸状況のなかで人間のなすことは、この貨幣の項にどのような観念を埋めこみ、どのような素材をあてはめるか、中心のもつ空白・余剰、「意味の貯蔵庫」からどのような意味をひきだすか(=貨幣の機能)」(以上 156-157 頁)ということだけである。

しかし吉沢がここで述べている「原型」は、先にわれわれが念頭においたユングの「元型」といかなる関係があるのか。彼はこの関連性に関する説明を具体的に展開しているわけではないので、詳しいことはわからない。われわれ自身が、両者の主張点を付け合わせて、単に推測的判断をするしかない。吉沢は、意識世界での意味づけの原点として、貨幣の存在意義を強調している。しかしユングは元型の問題を、むしろ無意識の領域の問題として理解するという明らかな相違を示している。つまりユングの元型論は、無意識と意識の関連性の中で展開されており、無意識の自己実現としての意識化という文脈の中で、この元型の意味を理解しようとしている。吉沢も、こうしたユング元型論との関連

性を問われれば、必ずやその表面的な相違を超えて、ユングの元型論を評価するであろうと推測できる。なぜならば彼も、意識の領域における意味づけの原点の設定というフレームワークの構造は、「先験的」に人間の認識的パターンとして与えられていると強調しているからである。そうした意識的・認識的パターンを根底から規定する「元型」が、ユングのいうように無意識的領域に存在するとしたら、それは吉沢の理論的主張を支え強化することはあっても、逆にそれを弱体化することにはならないであろう。このように人間は、無意識世界から規定された意識的・認識的な構造の型を、先験的に受け取っている。あとは具体的な素材的性質を備えた貨幣が、この意識的・認識的構造世界の中心に座るだけであると考えられる。しかしいかなる素材的性質の貨幣が、その中心に座ることになっても、貨幣の本質的概念は、すでに人間の本来的な認識論的構造が準備されたと同時に、成立している。こうして貨幣は、人間によって人為的に発明された道具というよりも、人間の本来的な認識特性そのものから沸き上がってくるものと理解できる。それゆえ今村(1994)も述べているように、貨幣形式は、人間にとっては、廃棄できない型と言えるのである。⁶⁾ 物々交換経済を貨幣発祥の必要性を論じる経済的基礎として想定することは、「幻想」である。物々交換社会は、貨幣経済とは、概念的にまったく「異質なもの」として理解されなければならない。

こうして貨幣の認識論的形式が、人間の無意識領域におけるユング的「元型」に支えられて成立しているのではないかと考えられるが、しかしさらに問題を

6) 今村が「貨幣形式は不滅である」と主張する理由は、本研究ノートの議論とまったく同じではない、吉沢の議論とも異なっている。しかしこれらはともに貨幣を単なる「道具」であると考える主流派経済学の主張とは本質的に異なる1つの大きな方向性を示している点で、認識的共通性の上に立っている。今村はジンメルを評価しながら、次のように述べている。「ジンメルは、経済学者のように、貨幣は「便利な道具」だから死滅しないというのではなくて、人間が関係の存在として存在するかぎり、関係の結晶としての貨幣(その意味では「道具」であるが)は人間の宿命的本質であるというのだ。貨幣は単なる道具ではない。道具なら取り替えできるはずだが、貨幣はそういう道具ではない。それは宿命としての「制度」である。人間から言語が廃棄できないように、貨幣(素材貨幣ではなく、媒介としての貨幣)も廃棄できない。貨幣形式は不滅である、人間の自由と同様に。」(72頁)

深く考えていく必要がある。具体的に「原型」としての貨幣は、いかなるメカニズムによってユング的「元型」に規定されて支えられるものとなるのか。この問題を明らかにするためには、吉沢の議論をさらに発展させた認識論的貨幣論を新たに展開しなければならない。

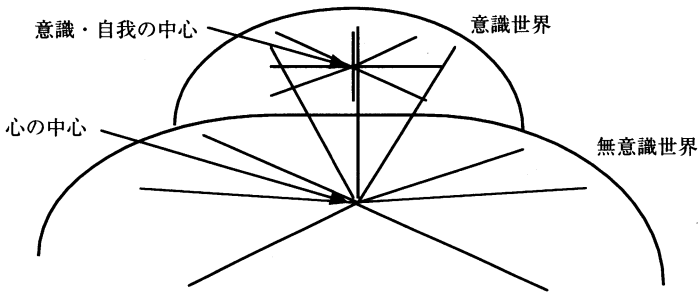
第3節 「意識の中心」と「心の中心」

意識世界における「原型」としての認識構造と、無意識世界にある(と想定される)「元型」との間の関係を具体的に考察していくためには、まずこの意識世界における認識構造が、常に現実の世界から流入する新たな情報によって「揺らぐ」ものであり、人間はその自分の意識的構造の揺らぎをつねに意味論的に立て直す努力を行っているというプロセスの問題を重視しなければならない。つまり人間は、流入する情報群を相互に矛盾なく首尾一貫して意味論的に解釈しえない事態が生じると、まず意識世界にある意味的体系の一部を破壊し、その上で新たな意味の解釈体系を構成し直そうとする。人間の意味の解釈体系は、このようにつねに揺らいで創造的破壊を行うことによって、繰り返し自己の現実世界への適応力を維持・発展させようとするのである。では揺らぐ意識世界の構造を繰り返し立て直すプロセスにおいて、無意識的な元型構造はいかなるメカニズムで、この意識世界に深い影響を及ぼしていくのか。こうした考察視点は、吉沢の「原型論」を、ただ単に静学的な問題の次元に押しとどめておくことを不可能にする。

まず動学的議論の準備として、(図1)のように「意識・自我の中心」と無意識をも含む「心の中心」を描いてみる。⁷⁾ 意識世界はこの「意識・自我の中心」を原点として認識的「原型」を構成しており、市場経済的文脈に即して考えれば、この認識的原型こそ「貨幣形式」ということになる。しかし意識・自我の中心は、必ずしも「心の中心」とは限らない。それは人間の心が、意識領域だけではなく、広大な無意識領域をも含んでいるからである。この心の中心を原

7) この図は、河合(1977)を参考にして描いている。

(図1) 「意識・自我の中心」と「心の中心」



点として、無意識世界の中にも大きく広がった「元型」構造が形成されていると考えられる。人間は、自分の意識世界しか認識しえないから、元型構造の全体を直接的に把握することはできない。しかし意識世界に「溢れ出た」元型構造に関しては認識できるから、そうした部分的な認識を寄せ集めて、自分の元型構造全体やその中にある「心の中心」に思いをはせることができる。では、これら「意識・自我の中心」とその周りに構成された「原型」構造と、「心の中心」および「元型」構造は、その依存関係の中で、いかなる意味論的ダイナミズムを展開すると考えられるのか。またそのダイナミズムを通じて、心の中心と元型構造は、いかにして意識世界の中にある意識・自我の中心と原型構造に、深い影響を及ぼしていくことになるのか。

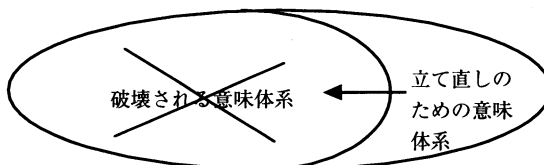
人間は直接的には自分の意識世界の中しか把握することができない。無意識世界は、「自分であって自分ではない」のである。いわば区切られたカーテンから漏れだしてくる部分的な現象を観察することで、その向こう側の様子を推測するしかない。また自分の意思決定によって直接的にコントロールできるのも、このカーテンのこちら側の意識世界の中だけである。従って人間は、普段は、意識世界のみが自分の内面世界であると考えて行動している。その意識世界の核にあたるのが「意識・自我の中心」であり、それを原点として意識世界の認識的・意味的構造ができあがっている。人間は、この意識世界の認識的・意味的構造を用いて、現実世界から流入してくる情報の意味解釈を行う。意味解釈

は、流入する膨大な情報の圧縮と整理を可能にし、人間の複雑な環境に対する適応力を飛躍的に増大するのである。しかし意味解釈システムは、他方で、つねに劣化の危険性にさらされている。つまり次々と流入する新たな情報の側から言うと、この情報流入は、いわばこの意味解釈システムの有効性を試す試金石としての役割を果たしている。これらの情報を首尾一貫した形で意味論的に解釈しえないならば、既存の認知的・意味的原型としての構造は、やがて何らかの形で、作りかえられねばならない。ではこうした認知的・意味的構造の劣化は、どのようにして立て直されることになるのか。

構造的立て直しが、小規模に行われるのであれば、問題は意識世界の中だけに留まる。(図2)のように、意識世界の一部を維持しながら、その意味解釈システムを基礎として、他の部分をどのように作りかえていくかを判断することができるからである。この状況においては、無意識世界を含む心の全体に広がった元型構造に依存する必要がない。意識世界だけの意味論的ダイナミズムが小規模に展開されるだけである。しかし意識世界における認知的・意味的構造である原型の作り替えが、大規模に行われなければならない状況に立ちいたると、上で述べた状況は、全く異なったものとなる。もはや意識世界の内部だけの問題ではなくなる。意識世界の大部分の認知的・意味的構造を作りかえるのであるから、意識世界の中にはその作り替えの方向性を指し示す残りの意味的構造は、もうほとんど残ってはいないのである。ではどのようなメカニズムが機能し始めるのであろうか。

人間はこの事態に直面して、初めて、自分が今まで意識・自我世界のみにとられて生きてきたことに気づく。自分を支えているのは、意識世界の原型構

(図2) 破壊される意味体系とその立て直しのための意味体系



造だけではなく、無意識世界をも含む心全体に広がった元型構造でもあることに目覚める。自分の意識世界の大規模な作り替えをいかに行うかを指し示すことができるのは、この無意識世界にも広がっている大きな元型構造全体である。この事態のなかで、初めて、心の中心を基にして心全体に広がった元型構造が、意識世界の認識的・自我的意味体系の構造的決定に、本質的な影響を及ぼすことになる。元型構造から、原型構造への影響は、意味的存在としての人間を大きく飛躍させるであろう。われわれ人間は、元型構造から分離して自由になることによって人間になるのではなく、むしろこの元型構造の存在に気づき、それからの影響を積極的に受けることによって、初めて「人間になる」のである。先にも述べたように、既存の自由の議論は本質的な点において大きな修正を加えられねばならない。

以上で述べてきたことは、ユングによっても違った形ではあるが、内容的には大きな共通性をもって語られている。人間は無意識世界とつながることによって、自分の小さな意識世界の殻を破って、大きな自己を形成することができると説明されている。ユングのいわゆる「個性化」という概念は、こうした無意識世界とのつながりによって新たなる大きな自己を形成するプロセスを説明している。この「個性化」を、古い意味体系を破って新たなる意味体系を形成するという1つの創造的破壊と解釈すれば、われわれが上で述べてきた意味論的ダイナミズムの話は、ユングの主張と驚くほどの一致を見る。このような視点に立って、次の節では、改めて意味の創造的破壊のプロセスと(真の)不確実性の関連性を考えてみる。

第4節 不確実性と元型構造

従来の「不確実性の経済学」は、確率変数によって記述できるいわゆる「リスク」の問題のみを扱ってきたが、本研究ノートでは拙著(2001)の議論を引き継いで、「真の不確実性」の問題を意味論的な視点から考察する方法論を採用する。この方法論的視点に立つと、貨幣論的原型論のみならずユング的元型論も、真の不確実性の問題の射程に入ってくる。原型論も元型論も、ともに不

確実性の意味論の中で、その理論的意義を統一的に理解することができるのである。つまり元型の存在性は、意識世界の中にある原型を相対化させて、その意識世界の中で展開される意味の創造的破壊のダイナミズムの自由度を拡大させることができると考えられる。具体的に言えば、無意識世界をも含めた元型構造は、意識世界における原型構造の大規模な作り替えを可能にする。これはユングの「個性化」の実現であり、それによって意味論的な不確実性を積極的に解消していける状況が整えられる。そしてこの不確実性の解消は、不確実性下での最後のよりどころとしての貨幣の流動性選好を減少させ、ケインズの言えは利子率の低下から投資を増大させて有効需要を拡大させ、実質的な経済活動を活発化させる大きな原動力になると考えられる。人間の内的・意味的構造は、不確実性の問題とさらにそれを原因として生じる経済社会活動の活性度に、きわめて大きな影響を及ぼしていく。

こうしてユング心理学の「個性化」の概念は、それを意味論的不確実性の概念とリンクさせることで、人間個人の自己実現の達成を説明するのみならず、マクロ的経済社会の有り様を大きく規定する力学として理解できるようになる。人間と人間社会は、単に自己の選択可能性を一方的に主張するのではなく、むしろ元型構造と深くつながっていることを認識することによって、初めて、真の不確実性の闇を切り裂き、その向こうに大きな可能性を見出すことができるのである。

参考文献

- 今村仁司 (1994) 『貨幣とは何だろうか』, 筑摩書房。
 河合俊雄 (1998) 『ユング: 魂の現実性』, 講談社。
 河合隼雄 (1977) 『無意識の構造』, 中央公論社。
 河合隼雄 (1991) 『イメージの心理学』, 青土社。
 塚本正明 (1995) 『現代の解釈学的哲学: デイルタイおよびそれ以後の新展開』, 世界思想社。
 中込正樹 (2001b) 「貨幣の哲学: 再考」, 『青山経済論集』第 53 巻第 1 号 87-116 頁。
 中込正樹 (2001) 『意味世界のマクロ経済学』, 創文社。
 中込正樹 (2002a) 『「自由」を超えて: 内発性の経済学』, 未発表。
 中込正樹 (2002b) 「競争の中の病理: 自由の喪失」, 『青山経済論集』, 第 54 巻第 2 号, 91-125 頁。
 西田幾多郎 (1947) 『西田幾多郎全集』第 1 巻, 岩波書店。

- 林 道義(1998)『ユング: 自己実現と救いの心理学』, 河出書房。
- 吉沢英成(1981)『貨幣と象徴』日本經濟新聞社。(筑摩書房, 1994 年。)
- 和辻哲郎(1962)『倫理学(上)』, 岩波書店。
- Friedman, M. (1953) "The Case for Flexible Exchange Rates," in *Essays in Positive Economics*, Chicago: Chicago University Press. (佐藤隆三, 長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』, 富士書房, 1977 年。)
- Hillman, J. (1983) *Archetypal Psychology*, Dallas, Texas: Spring Publications. (河合俊雄訳『元型心理学』, 青土社, 1993 年。)
- Jung, C.G. (1966) *The Collected Works of C.G. Jung*, editors, S.H. Read, M. Fordham and G. Adler, London: Routledge.
- Jung, C.G. and K. Kerényi (1951), *Einführung in das Wesen der Mythologie*, Zurich: Rhein. (林道義訳『元型論: 無意識の構造』, 紀伊国屋書店, 1982-3 年。)
- Samuels, A. (1985) *Jung and the Post-Jungians*, London: Routledge. (村本詔司, 村本邦子訳『ユングとポスト・ユンギアン』, 創元社, 1990 年。)